

を抱きしめ、どこまでも続く暗い泥んこ道を逃げ続ける自分の姿だった。

保雄が遙か満州の大地に両手を合わせ、現在は中国東北部と呼ぶ旧満洲を調べていくと方正に日本人公墓があるのを知ったという形で、公墓の建立の経緯が保雄によって語られる。

「知りませんでした。偏屈者、頑固者の私は、目と耳を固くとざし石になって（満洲のことを忘れようと）逃げまわってきたのですから」と、日本人公墓のことが1頁ほど書かれている。ドキュメントではなく小説で方正日本人公墓のことが書かれたのはたぶん初めてだろう。

佐江さんはどこで日本人公墓のことをお知りになったのだろう。実は日経に記事が出たあと、すぐに「星火方正」などをお送りした。その後、『昭和質店の客』が刊行されると、お贈りいただいたので、たぶん方正公墓の存在はこの会報ではないかと思ったが、この原稿を書くにあたって改めて佐江さんに確認した。それによれば、08年6月の中国東北部への旅で、牡丹江の元円明小学校の卒業生から、その存在をお聞きになったが、より詳しくは「星火方正」で知ったとのことだった。

小説では、柳田保雄の他に、「昭和質店」に出入りしていたレビューガールのテンブル染子は慰問団で戦地へ行き、その恋人、進ちゃんは、ニューギニア戦線で地獄の敗走の果てに死んだ。

佐江さんは、本書のあとがきでも、「この小説は、戦争を少しは体験した昭和戦前生まれの私が、死ぬまでに書かねばと考えていた作品です」と書いている。

生き生きと浅草で生きた庶民たちが戦争で翻弄された姿を描いた本書を、戦争の実情を知らない若い人たちにぜひ読んでほしいと思う。 (新潮社刊 定価：1600円＋税)

書籍案内

* 『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」－ハルビン市方正県物語－』

方正友好交流の会 編著

日本人公墓建立までの経緯などを王鳳山と奥村正雄が、中国養父母公墓を自力で建立した遠藤勇さんの半生を大副敬二郎が、方正県住民の家に住み込み、全力で稲作指導に邁進し「日中友好水稻王」といわれた藤原長作さんの一生と、敗戦後八路軍に入り帰国後、日中友好運動や麻山事件の犠牲者の公墓建立で活躍された金丸千尋さんの半生を大類善啓が執筆。また「方正友好交流の会」を成立以前から支えた人々の座談会を牧野史敬が司会進した記録などが収録されている。定価 1500円。(事務局に残部あり)

* 『約束 満州の孤児たちの生命の輝き』

増田 昭一 著

牡丹江から逃れて新京敷島地区難民収容所に辿り着いた著者が、かつて孤児室で死んでいった仲間の子供たち、生きて帰ることができなかった子供たちの無念と心の叫びを、書き表した書だ。当時、著者は17歳。孤児たちのお兄さん的な存在だった。毎日、何人もの孤児たちが収容所の中で死んでいく中で、神や仏のことを話し合い、議論し、助けあった子供たちを追想した鎮魂の書だ。本書は次に紹介する『オリオンの墓』の永井瑞江さんな

どの多くの人たちに影響を与えた。また過日ソプラノの甘利真美さんが、増田さんの本をもとに、<歌と朗読でつづる小さな命のものがたり>として今年5月横浜で公演を行った。

(定価：1500円、制作・発行 夢工房 電話 0463-82-7652)

* 『オリオンの墓—あの冬満洲に消えた難民孤児たちへ』 永井 瑞江 著

著者は1933年、旧満州奉天（現瀋陽）で生まれ、無政府状態の長春で難民生活を経て、長野県上田市に帰国。05年に、満洲国13年間の歴史を少女の目でみた記録『おばあちゃんの満洲っ子日記』を出版。本書は、増田昭一著『約束』に登場する子供たちを連れてきて、満洲の日本人たちの悲劇がなぜに発生したのか、在満邦人への棄民指令の公電、不可解な避難命令と疎開命令など、関東軍の責任の所在を追及している。

(定価：1500円 編集制作 信濃毎日新聞社 026-236-3377)

* 『満蒙の新しい地平線 衛藤藩吉先生追悼号』

満蒙研究プロジェクト編集委員会編

本書のまえがきに、一橋大学名誉教授の田中克彦氏（モンゴル学、言語学）が、<「満蒙」は、かつて日本がこの地域の支配のために勝手に造った造語であり「満洲国領土内のモンゴル諸族の歴史的空間」という固有の意味をもつものであって、決して漠とした「満洲とモンゴル」ではない>と記している。

第一部は06年の方正の総会で講演をしていただいた衛藤藩吉先生の追悼特集である。その中に「星火方正」4号所収の衛藤先生の原稿<曠野に果てたちちはは>、また大類善啓が「星火方正」6号に書いた<衛藤藩吉先生を偲ぶ>が収録されている。

第2部は満蒙研究。<チンギス・ハン モンゴル帝国成立800周年に思う—モンゴルをノモンハン戦争から読み解く>という刺激的な田中克彦氏の講演が収録されている。

(定価：2381円(税別)、桜美林大学北東アジア総合研究所、川西重忠発行)

* 『中国残留日本人という経験 「満洲」と日本を問い続けて』 蘭 信三 編

本書は、中国残留日本人の多彩な経験を通して、現代の日本を問い、「満洲」とは何だったのかを総括する。いわば中国残留日本人研究の総決算ともいえる600頁を超える大部の書だ。会員の南誠さんが『想像される「残留日本人」—国民をめぐる包摂と排除』を、同じく猪股祐介さんが『満洲農業移民から中国残留日本人へ』というタイトルで論文を書いている。

(勉誠出版株式会社 電話 03-5215-9021 定価 8000円、税別)

* 『風雪に耐えて咲く寒梅のように 二つの祖国の狭間に生きて』

可児 力一郎 著

著者は、旧満州へ入植してから17年ほどの中国での残留生活を経て帰国するまでの記憶を綴ろうと、慣れない日本語と苦闘しながら、2003年本書を書き上げた。著者宛てに直接申し込んでいただきたい。〒399-5303 長野県木曾郡木曾町田立1223 可児力一郎

(かに・りきいちろう、定価1700円。電話 0573-75-4755 F A X 0573-75-4557)

《報告》

ありがとうございました

前号の会報10号発行後、カンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。(敬称略、受付けた順に記載しました。2010年12月6日現在)

貞平浩 稲川清一 上条八郎 西永守 牧野史敬 井出正一 小島晋治 山内良子 野田尚道 阪田健夫 田中朝子 小関光二 榎本晴夫 高橋健男 井出孫六 網代正孝 篠田欽次 黒岩満喜 辻康子 星浩一 近藤喜一郎 滝永登 木村美智子 小倉光雄 鈴木春夫 小柴玲子 宮川龍二 坂部昌子 遠藤勇 渡辺一枝 長塚淑江 石橋実 中村静枝 宮田一郎 伊佐昭紀 柴崎葦津子 福久一枝 高木凉子 飯白栄助 佐藤千栄子 東山健吾 石田和久 竹中一雄 山下美子 青柳幸司 山田寿子 齋藤實 竹井成範 川口憲 小栗博 鵜澤弘 大島満吉 森田恭子 宮下春男 風間成孔 米山惇 山本勝彦 北澤広子 町田静子 吉田敬子 栗原貞子 白西紳一郎 杉田春恵 福井以津子 古賀勇一 山田弘子(越谷市) 西沢昭祐 阿部恵一 鳩貝清太郎 鈴木俊作 森清多美江 湊谷節子 鈴木幸子 伊原忠 高橋かよ子 阿久津国秀 齋藤兵一 久保祐雄 佐藤千栄子 中島俊江 羽田澄子 藤村光子 加藤重幸 土居司 木戸富美江 千本健一郎 北澤吉三 前山秀樹 日高美保 石井愛輝 野澤咲子 寺村道生 寺本康俊 小林浄子 桜井博之 塩谷茂和 今村隆一 栗林稔 先崎千尋 山田陽子 打田茉莉 新谷陽子 清水薫 可児力一郎 松澤康雄 岡崎友美 小堀雄三 小林英子 森博勇 香山磐根 小柳保征 佐藤貞雄 島辰夫 山本義輝 駒形好幸 島田成夫 末広一郎



<編集後記>

前号の9号で、北京の佐渡京子さわたりにさんの原稿の中の写真が間違っていた。佐渡さんは趙喜晨さんの中に挟んで向かって左の方である。佐渡さん、ご容赦のほどを。

日中関係は今厳しい局面を迎えている。だからこそ今、国土の大小にとらわれず、本当に精神的な意味での大国としての度量が両国に求められている。我々としては、方正公墓建立の経緯を追体験しながら、国交回復前の周恩来や陳毅らの国際主義的で懐の深い心を読み取りたいものだと思う。

《表紙写真撮影・板垣裕一》

『星火方正～燎原の火は方正から～』(第11号) 2010年12月15日発行
発行：方正友好交流の会 編集人：大類善啓 Email：ohrui@jcost.or.jp
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6 日本分譲住宅会館4F
(社)日中科学技術文化センター内 電話：03-3295-0411 FAX：03-3295-0400
郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会
HPアドレス：<http://www.houmasa.com/>